

## 早春の味覚 — 「海」から「山」へ —

江戸時代の三田藩主九鬼氏は、先祖の祭祀を通じて故郷の志摩国鳥羽とのつながりを持ち続けました。しかし藩主自身が直接訪問することはなく、家臣による代参や家老名での文通が原則でした(市史第1巻第3部参照)。鳥羽の菩提寺である常安寺の場合は、年始と6月に行われる<sup>きとう</sup>祈祷の際に恒例のやりとりがあったことが知られます。

年始の場合は、まず年頭に常安寺から三田にあてて賀状が送付されます。それに対して三田からは原則として2月16日付け(新暦では3月上旬頃)で、家老の連名による答礼の挨拶状が発送されます。これは鳥羽の<sup>たしろのみや</sup>田城宮(市史だより1月1日号参照)への参拝日にあわせた日付と考えられます。その際には新年の祝儀として金200疋(現在の3万円程度)も届けられました。そして常安寺からはさらにその答礼として、3月上旬頃(新暦3月下旬頃)に特産のワカメが三田に向けて発送されます。送付先は藩主のほか家老や奉行、代参で鳥羽を訪れた家臣および三田の菩提寺である心月院でした。ワカメは漢字では和布と書きますが、三田への送り状にはわざわざ「若和布」と書かれており、旬の新ものであることが強調されているかのようです。

やりとりされた書簡の包み紙からは、三田と鳥羽との文通は大坂、京都、宇治山田(現・三重県伊勢市)の飛脚を經由しておこなわれたことがわかり、当時の情報伝達経路が知られます。また鳥羽からのワカメの発送は、三田藩の蔵屋敷が所在した大坂江戸堀一丁目(現・大阪市西区)の御用商人に依頼されたこともわかります。ちなみに三田と兄弟藩にあたる丹波・綾部藩(現・京都府綾部市)の九鬼氏の場合は、藩主と常安寺が直接やりとりをする習慣でした。そして常安寺からの答礼の進物としては<sup>のり</sup>海苔が正月中に発送されています。海苔の収穫は冬から早春にかけてですが、「砂入り」を心配した手紙が残されていることから、おそらく初物の加工海苔がはるばると丹波まで届けられたものと思われます。

春が近付いてきました。皆さんも友好都市鳥羽市に旬の味覚を味わいにお出かけになり、交流を深めてこられてはいかがでしょうか。